イザール川のビオトープ

1．はじめに

平成４年５月14日から26日にかけて、㈶都市緑化技術開発機構の主催する海外調査に参加する機会を得た。その調査で、ドイツのミュンヘン市内を流れるイザール川河畔のビオトープを視察した。公式訪問先であるミュンヘン市建設課の公園管理事務所は、イザール川の河畔にあって、緑に囲まれた歴史を感じさせる２階建ての事務所の中にあった。そこで担当者からイザール川とクラインガルテンの概要についての説明を受けた後、Mr. Rauch らの案内で現地を見学した。

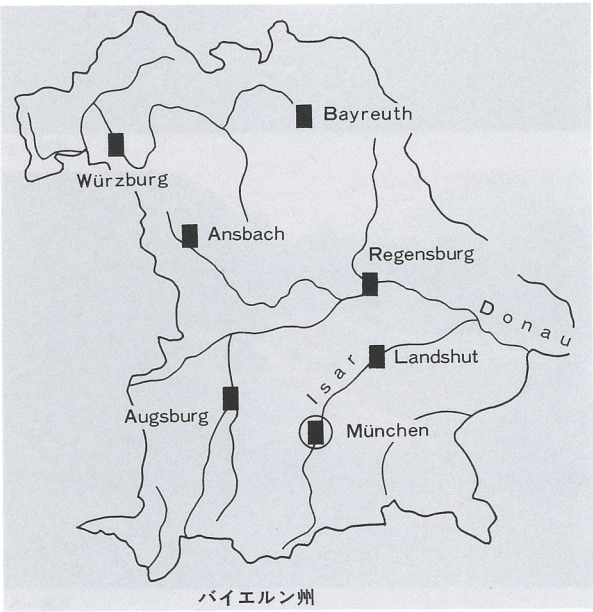
ドイツをはじめとするヨーロッパは、身近な場所に自然をとりいれた、いわゆるエコロジカルなまちづくりでは先進地であり、この視察もたいへん興味深いものであった。

2．イザール川の概要

イザール川は、ドイツとオーストリア国境付近のアルプス山脈カルウェンデル山に源を発し、ドイツ第３の都市ミュンヘンの中心市街地を貫流し、デッゲンドルフでドナウ川に合流する。(図－１)

今回視察に行った場所は、このうちミュンヘン市の中心部に位置する英国公園に隣接した所で、公園とイザール川とが創り出す自然は、都市の中では貴重な憩いの場として多くの市民に親しまれている。

図－１　イザール川の位置



3．イザール川のビオトープ

(1)ドイツにおけるビオトープ

近年、ビオトープという言葉を様々な場で聞いたり見たりすることが多くなった。ビオトープというのは、もともとドイツで生まれた概念で、通常は生態学的空間単位として理解されているようである。これは、①学術的に貴重な生態系はもとより、普遍的で身近な自然をも対象としており、②面・線・点など様々な形や大きさ、方法でネットワーク化が考慮され、③既存の生態系の保護だけでなく、開発事業などと連動して自然の復元や創造に取り組む、等の特徴があるといわれている。

こうした考え方は、ドイツをはじめとするヨーロッパでは20年程前から議論されるようになったということである。イザール川のビオトープは、日本の都市を見慣れた目からはかなり広大なものに見え、また、川の周囲に広がる森林のボリュームも、そうした取り組みの歴史を感じさせるのに十分であった。

(2)整備の概要

ミュンヘン市は、バイエルン州の中心都市として古くから栄えた歴史のある都市であり、人口は約130万人で、面積の約50%が居住地となっている。

イザール川は、アルプス山脈のカルウェンデル山を水源とし、そのためアルプスでの降水が多いときはしばしば洪水も発生し、また、流量変化が多いことから航行はできないということである。

ドイツにおける河川管理の制度については十分に説明を受けることができなかったが、河川等級では１級河川とい

写真－１　公園管理事務所付近のイザール川

業務部 参事　小林範之

うことである。また、洪水防御計画は、日本で行われているのと同じように、降水確率を基に算定しているということで、現在の整備は100年確率で、計画高水は1500m³／secということである。計画規模の流量が流れた場合、水面は石橋のアーチ上端から50cm下の高さになるという説明を受けた(写真－1)。また、高水敷への冠水頻度は、2～3年ということである。

イザール川の整備課題として、説明に当たった担当者は、①自然の保護、②市民のレジャー、休養、③洪水の防御、の3点を指摘していた。また、この他の課題として、ミュンヘンでは密集した市街地の構造から、ヒートアイランド現象が見られるが、イザール川の水辺と緑地が、こうした都市気候の改善にもかなり重要な役割を担っているとの説明もあった。

整備にあたっての用地確保の問題については、イザール川においては新たに用地の買収等は行わなかった、ということであるが、同市内の他の河川では、こうしたビオトープの創造のために用地を買収した例もあるとのことである。

イザール川の現況について、以下に写真で紹介する。

4．おわりに

今回は、都市の緑化をテーマに欧州4カ国を視察した。私にとってはじめての国々であり、緑が多く歴史を感じさせる町並みや建物、徹底した景観への配慮等、興味の尽きないものであった。わが国では、多自然型川づくりの推進が重要な課題となってきているが、わが国の自然環境にあった、豊かな川を後世に残せるよう一層の努力が必要であることを改めて感じる機会となった。

写真－2　水辺で日光浴を楽しむ市民

写真－3　水辺で憩う市民

写真－4　イザール川の河畔林と遊歩道